

「別人」の走りくれた一時帰国中の出会い



九州地区選考会でフィニッシュする第一工大のアニーダ・サレー＝吉本美奈子撮影

全日本大学駅伝に2年連続26回目の出場を決めた第一工大のエースは、モロッコからの留学生アニーダ・サレー（4年）だ。6月19日の九州地区選考会で、とんでもない強さを見せつけた。

7校が参加し、各校上位8人の合計タイムを競った。各校の主力が集まる第3組を走ったアニーダは、2位以下を2周以上も周回遅れにしてしまった。

気温31度の過酷な条件で出した28分48秒59は、ハイレベルな関東地区選考会の成績にあてはめても6位相当の好記録。だが、アニーダは「28分20秒くらい欲しかった。蒸し暑かったので残念」とケロッツとしていた。

モロッコ最大の都市カサブランカから南西に5000⁺弱のアガディールという街の出身。14歳から陸上の試合に出始め、2015年にはモロッコのクロスカントリ―選手権U20の部で4位に入った実績もある。

現地の大学に入学し、競技を続けながら世界の歴史・文化を勉強しているときに日本行きの声がかかった。決心した経緯を尋ねると、日本語ではうまく説明できない様子だったが、「日本に興味ありました。今では大好き」と話してくれた。

第一工大のある鹿児島県に来

たのは19年。1年目は環境に慣れず、全日本大学駅伝の4区で区間20位と振るわず。だが翌年、思わぬことが転機になった。新型コロナウイルスの流行だ。感染拡大の影響で20年3月にモロッコへ一時帰国。11月に日本へ戻るまでモロッコの代表選手たちと一緒に練習できたのだ。「東京五輪3000⁺障害金メダルのスフィアヌ・バカリもいた」。練習についていくのは大変だったが、「少しずつ自分のレベルが上がっていくのが分かった。速い人と走ると、私もがんばれる」。

日本に戻ったアニーダを見て、岩元泉監督はびっくりした。「体がぐっと絞られて別人になっていた」

昨秋は成長が実績に表れてきた。9月の日本インカレ5000⁺は4位。11月の全日本大学駅伝は1区で区間8位に食い込んだ。今年は5月のゴールデンゲームズinのべおかの5000⁺で、13分48秒03と自己最高を6秒以上更新した。

26歳になったアニーダにとっては3回目、自身最後の出場となる全日本での目標は「1区で区間賞」。そして、その次もある。「卒業したら日本でマラソンをやりたい」と夢は広がる。

（酒瀬川亮介）